

村上市上海府地区のテングサトリ

山崎光子

一、はじめに

新潟県の北部、村上市上海府地区の海女の美しい衣装に出会ったのは（写真1）、昭和四九年の夏の日本家政学会の民俗服飾委員会の新潟地区研修旅行の折であった。当地の珍しい覆面頭巾ドモコモの見学のために地区担当係として企画したものだだったが、上海府地区に覆面頭巾のほか、いまだに織られている藤布や、海女の衣生活など民俗服飾の宝庫であることをその時始めて知った。その後の数年間に、上海府の吉浦、柏尾などで、多くの方々の御協力によって得た調査の結果は、新潟県民俗学会（昭和五四年度年会）、その他で発表した⁽¹⁾が、覆面頭巾や藤布織り、田畑山の仕事着などにかたより、とくに海女の生活については報告することのないまま今日に至ってしまった。

上海府地域の歴史的背景や概要については、すでに他誌で述べたので、その詳細は省略するが、寛永時代頃から地元の廻漕問屋が活躍しており、今でも男性の多くが遠洋航路の船員として村を離れて働いている。「越後野志」⁽²⁾によれば、文化年間ころまでは柏尾などは塩業で栄えており、また「漁人樵夫雑居ス」と漁山村であったが、海女の歴史

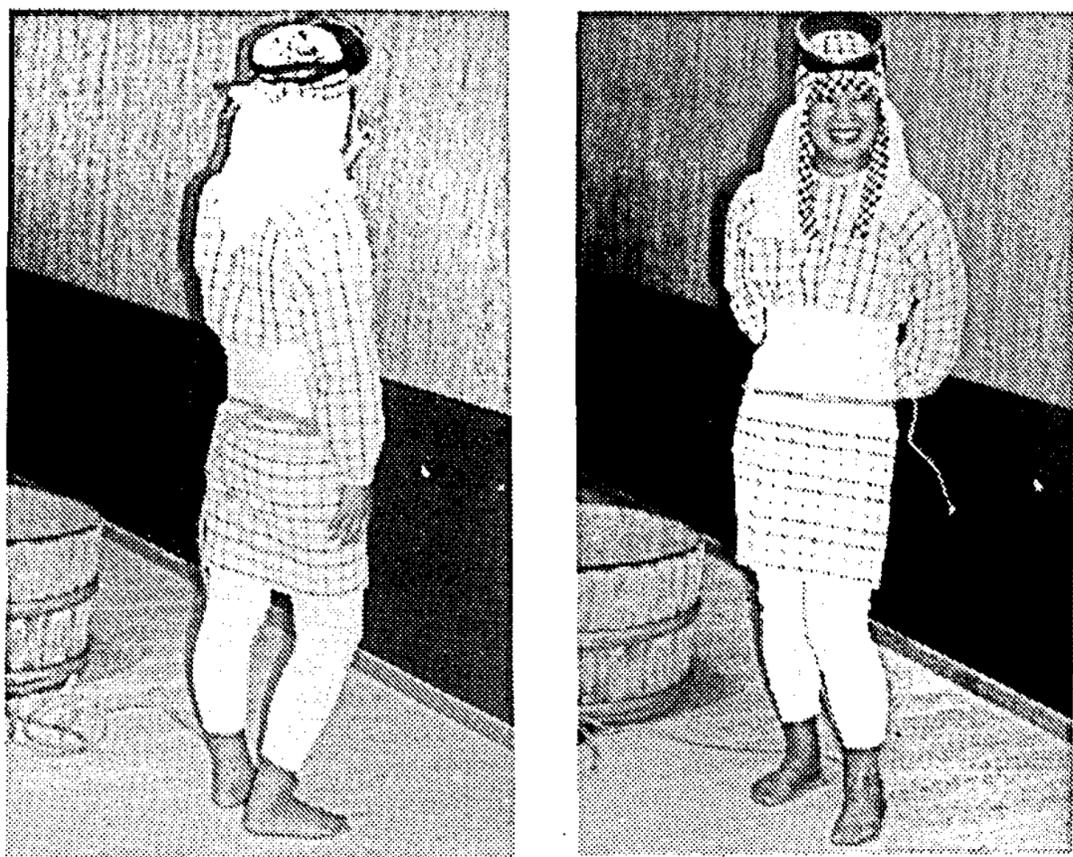


写真1

は明らかではない。しかしテングサが海からの主要な産物として換金出来るようになったことの記録は後述のように明治期からであり、「テングサトリ」と呼ばれる海女たちが、それで一家を支えた時期もあった。

ところで我が国の水産史の裏面にある海女の生活やその服装については比較的記録されることが少なかったが、昭和八年頃から瀬川清子氏⁽³⁾の精力的な調査記録があり、宮本常一氏⁽⁴⁾の記述などによって、その大略が明らかにされ、また近年では地域的には詳細な調査報告書もある⁽⁵⁾。一方、上海府についても、昭和一七年に渡辺氏⁽⁶⁾、二九年に佐久間氏⁽⁷⁾、瀬川氏、五二年には伊藤氏⁽⁸⁾の報文があり、更に最近の村上市史編さん民俗部門調査⁽⁹⁾の矢部氏、赤羽氏の報告もある。

上海府の海女の生活と服装について、本来は、県内外の他地域と、その歴史的変遷を踏まえたくて比較検討したいところであるが、資料不足のため、ここでは上海府のテングサトリの生活と服装の様子とその推移を、そこに生きた人々からの聞き取りや、その出荷額等の資料から明らかにしてみたい。

なお、調査年は昭和四九―六二年の間の十数回にわたる調査時の聞き書きを集約したが、撮影の大半は昭和五四年七月一二―一五日のものである。また、主な話者の方々は左記の通りである。

瀬賀 ツル氏 明治四二年 八月一〇日生れ
平野 チエ氏 大正 七年 二月 三日生れ
三浦 トリ氏 明治三四年一〇月一日生れ
相馬 才子氏 大正一一年一〇月 九日生れ
瀬賀 喜和氏 昭和 六年一二月 六日生れ

二、テングサトリ（海女）の生活

上海府の村で男達の留守を守る女達の仕事は、海と山に挟まれた狭い田畑の耕作のほかに、夏期の重要な仕事のテングサ採りがあった。テングサも今とちがってたくさんあり、船乗りの夫からの収入を補って一家を支え、「かつては命の糧だった」と言われている。しかし今では全く採れなくなってしまった。海からの収穫物は夏はテングサ以外にも、エゴやイガイ、近年のアワビ等のほか、冬のノリがあり、また春はワカメなどもあった。

1 テングサを採る

テングサ採りの口開けは七月一〇日、期間は八月いっぱい、お盆の前にも一回それを換金できたので、お盆の支度はたいていその収入によって、浴衣や米を買うなどして賄われていた。二度目の換金は八月末だった。

一人で五〇貫もとり一〇五円を貰う人もあったが、昭和八、九年頃それは大金だった。そのころ一〇〇円札の事を

イノシシといった。猪と同様めつたに見られなかったからという。イノシシを貰うのは村でも三、四人位だった。米一俵五円五〇銭、白地の木綿一反は葛塚織り二円五〇銭、亀田織り二円の時代だった。昔はテングサ採りの上手な人から順に嫁に貰われていったという。戦後の昭和二〇、二一年頃には、テングサをさらして白くして、百匁を束にして背負って山形県に行き、米と替えたりした。

小学校でも学校行事としてもテングサ採りの日が必ずあり、その収益を図書費や行事の資金にあてていた。村の人々が採る前の七月一日から一〇日までの間の三日間に半日、三年生以上が男女兒とも海に潜ってテングサを採った。オケをつけて潜れないと肩身の狭い思いをした。一、二年生は採ってきたテングサのごみをとったり広げて干したり、火を焚いたりして浜で待っていた。潜るのはいづれも午後からである。

七月一〇日の口開けから一〇日間位はイソベでも採ることができるといえる。子供達のとるイソベのテングサは五、六センチ位からの短いもので、半日に四回位も海に入った。寒くなるとみんなで浜に上がって、波打ち際近くの焚火にあたり、ジャガ芋を焼いたり、キュウリをかじったり、ミガキニシンを食べたりして楽しんだ。土手に近い所には涼み小屋が村で三箇所くらい作られてあり、休息したり、デタチ（衣服）を着替えたりした。

大人の名手たちは沖に出て二五、六センチから二〇センチのごみのない立派なテングサを採った。一八歳にでもなれば一人前だった。大人についてどんな沖へでもいった。

柏尾では昔から、五、六人の海女が組んで、男シヨ一人を頼んで船を出してもらってテングサを採りに行く（写真2）。謝礼は一夏に取高の一分五分を採ったテングサで支払った。

吉浦のテングサ採りは船では乗り出さず、佐渡の観光のクライブネのように、テングサトリハンゾウというオケ

と折ってまわれれば、すぐ底に着くのでそう呼ばれている。その他シランソのクリなど上海府の裏山の名前が付けられている。

深いところは岩が山の谷間のようにずっと並んで続いていて、そのうちの薄暗くなったところにテングサがよたよたと生えているが、そこまではいるには肺活量がないと潜れない。上手な人は真っすぐ潜っていく。息の続くかぎり潜ってテングサを採る。腕に一杯になったら、足で岩を蹴って浮きあがる。手で、時には足でナワを曳いてオケを手繰り、テングサの水気をふるんと両手で良く振ってきりオケに入れる。五、六回潜ってテングサトリハンゾウ



写真2

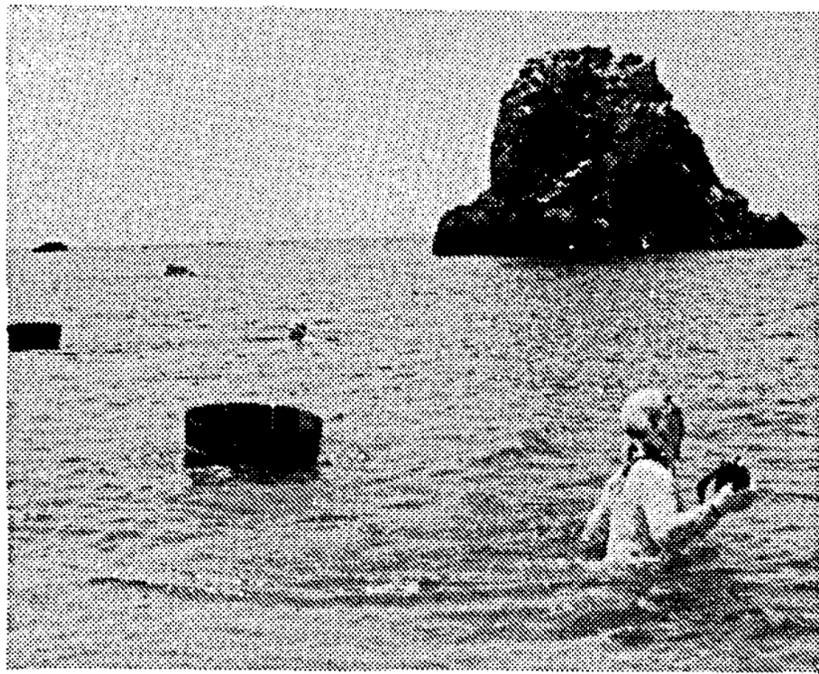


写真3

(径六五、深さ三五センチ位)に乗って、板キレでかいて行った。テングサ採りの名手は、イソベからオケがようやく見えるくらい沖まで行って採った(写真三)。一杯になったらテングサトリハンゾウを押しながら泳いで帰るが、二時間半位で一杯になり、一日二度くらいは行くことができた。

テングサは沈んだ岩のあるところにたくさん生えていて、そこをクリという。オリグリという名のところは、体をくるっ



写真4

の底がかくれれば、テングサが多くある場所の証拠となる。

潜るときはテングサトリハンゾウに付けた一〇ヒロのサイナワを腰に四回位巻く。一ヒロは両手を一杯に広げた長さである。つかまっているオケをばいっと離して潜っていく。四ヒロ半潜るときは、少し沖に流れる程度に六ヒロ位に伸ばして潜る。深い所にもぐる時は沖でサイナワを長く伸ばして潜った。短いと窮屈で動きにくく、長すぎれば浮き上がってからナワを引っ張って、オケを手繰り寄せるのに手間がかかる。オケからは潜っているときは一・五メートル、浮き上がった時は三メートルくらい横に離れているが良い。

サイナワはハンゾウの底に穴を開け、縄がよじれて切れないようにくるっと自由動く木製のクルリに付けられている(写真4)。サイナワの縄は正月一〇、一日のフナダマサマのお祝いのにきに、エンギをつけて一〇ヒロを二本くらいなう。

採ったテングサは四、五回海水に入れてはもんで天日に干し、最後は真水に入れてもむとさらされて真っ白になるが、出荷するときは、黒いままでかさかさに良く乾かして出した。湿っていると出荷の現場で干し直させられた。テングサは藁で編んだトウロウと呼ぶカマスに入れてテングサカの現場まで運んだ。トウロウは人間が二、三人もはいれる大きな俵のようなもので、出荷したあとはたたむことができた。

テングサは村ごとに場所を決めて持ち寄り、そこで秤に掛けられるが、

それをテングサカケと言う。吉浦ではお寺の前の広場だった。柏尾の上海府村役場に集められ、長野県の商人が来て、上海府地区のテングサを入札してその年の値段を決める。そのうち村単位でテングサを秤に掛け、まとめて出荷した。長野でカンテン作りに使うということだった。

2 エゴ、アワビなどを採る

〔エゴとモズク〕 テングサのほかエゴを採った。七月の土用の頃になると、ハリハリしたよいエゴが採れた。ナギの日に二、三日で採った。エゴを採る時は船を出してもらおう。

午前中に採って、ただちに昼から干した。天気の良い日に一日で乾さなければ、ねたねたして駄目になってしまう。一日に四回くらい揚げるのが普通だった。一日に一〇貫以上はとり、全部で五〇〜六〇貫はとった。少しは生計を助けた。いつも採れるということではなく、エゴのある年と無い年があった。ある年でもシケルと、エゴはゴモ（ホンダワラのような海藻）の上にかかって、ゆらんゆらんと動いているので、みんな落ちてしまう。落ちると村中の人が浜に出て、打ち上げられたエゴを拾った。

モズクも昔からあった。オモテ年とウラ年があり、豊作の年には今でも採れるが、最近はおナゴシヨが採りに行かなくなった。

〔イガイやサザエ〕 イガイ採りもしたが金にはならなかった。自分たちで食べた。貝から出して串に刺して焼いて酒のサカナにしたりダシにした。てんぷらにしてもおいしかった。

カキも少しは採れるがイガイと同じに自家用だった。カキの採取量にも波があって採れるときと採れないときがあっ

た。サザエも昔は採ったがサザエを買う人などいないので金の足しにはならなかった。今は民宿でよく用いられている。

〔アワビ〕 アワビは昔はなかった。上海府でテングサの採れなくなった昭和三六年ころから急にアワビが採れるようになった。七月一日解禁で八月末まで採れたが、特に昭和四二年頃から五年間が最盛期だった。次第に減少したため、村上市の水産試験場によってアワビの稚貝が放流された。しかし、乱獲したためか少なくなっている。

〔ワカメ〕 ワカメは昔はあった。昭和一〇年から一五年頃にたくさん採れた。五月末頃からとれる。まだ寒いので船の上に乗って採るが、吉浦には船が三、四そうしかないので、六月五、六日頃になって水が少しぬるむと潜って採った。

3 ノリを摘む

冬の海女の仕事はノリ摘みである。一月のはじめころから皆で一斉に摘んだ。三週間もすれば又伸びてくるので、二月いっぱい間に三回皆で摘む。三回までは、どんなにノリが一杯にあっても個人で勝手に採ってはならないという不文律があって今でも続いている。三回採ったらあとはアケツパナシにして自由に摘める。

寒さによっては一二月末からのこともあった。昭和二二年頃までは、なんでもひと月遅れで、そのころは二月正月だったから、正月にノリが間に合った。

ナギのいい波のない日に、「今日はノリツミします」とフレがでるので、みんなが支度をして、自分が登ろうと思う岩の上がり口や波打ち際にハシゴなども用意して待機している。またイワノリは岩に波がかぶって出来るので、イ

ソベの岩だけでなく、沖の岩にも良いノリがついている。沖にはノリツミハンゾウに乗って摘みに行く。ノリツミハンゾウは大人なら二人、また、大人一人に子供二人が乗れるくらいの大きなタライなので船の代わりになった。目指す沖の岩の方向に運んでイソベまで下ろしておく。八時半頃、村の浜のどこからも見えるところに、区長さんの竿の先に付いた旗が振られると一斉に摘みに出た。後に放送で知らせるようになった。

摘んだノリをカツラのテングにいれて持って帰った。ノリは水で良く洗って岩や砂を取り除き、マナイタにのせて庖丁でたたいて切った。ノリ摘みの季節になると村中にその音がとんとんと響いていた。一〇センチから一五センチの長いノリを四、五センチに切って水に溶かして、ヒシヤクですくい上げ、スに打って製品にした。

市販のノリに比べ少し隙間の空く粗いノリであるが、香りが良く、歯ざわりも良く、この村で生まれ育ち故郷を離れた人々には忘れ難い懐かしい味だった。販売もしたが、上海府の名産として、三枚、五枚、一〇枚と包んで進物用やお土産にしては喜ばれた。

三、テングサトリの服装

この地域では作業用の服装をみなデタチと呼んでおり、夏季のテングサトリのデタチ一揃いはテングサイショウと叫ぶ。イガイ採りなど海に潜る海女の服装も勿論いずれもテングサイショウである。なお、ノリ摘みは冬季の仕事で、服装は海女のテングサイショウとは全く異なり、むしろ農作業衣などと同類のためここでははぶく。

〔メガネ〕 テングサを採る時の水中メガネは、昔は今の形とちがって丸二つのメガネだった（写真5）。管状の



写真 7



写真 5

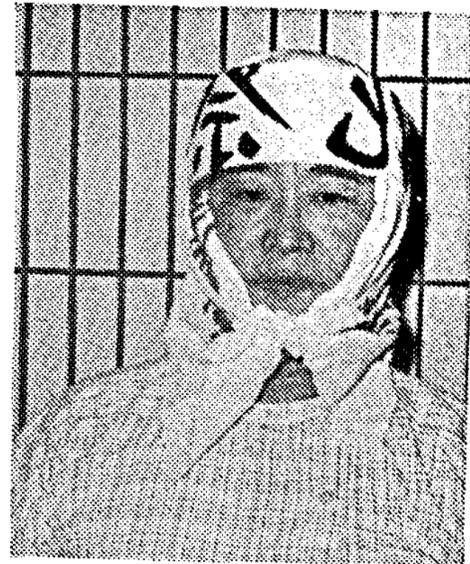


写真 6



写真 8



ゴム紐がついており、その中に綿糸（縫い物用の糸）が入っていて、自分の頭の大きさに合わせて調整しメガネのわきに付いているカネのワッカに結ぶ。

昭和三〇年頃から、今一般に用いられている大きな一眼のメガネが流行ってきたが、鼻まで入ってしまうことに年輩者は抵抗があつて、今でも二つメガネの人もいる。もっとも話者の祖母たち（明治期以前の生まれ）が海に潜った明治のころはメガネなどはなかったので、テングサ採りの時期はいつも赤い目をしていた、素目なので多くは採れなかったという話を聞いている。

ミミセンは昔は油をしみこませたものを用いたようであるが、昭和に入ってからにはゴム粘土を使っている。

〔テヌグイのカブリモノ〕 テングサイショウのカブリモノはテヌグイで作った。大正になってからと思うが、テヌグイ一本の後ろ側の中央に、かぶった時三角に垂れるように（写真1）四角い布を入れるようになった。サラシのオビをとったときの端布をそのために用意しておく。後ろ頭頂に小さい穴を布を折り曲げて開け、水をはらまないようにした。

テヌグイのカブリモノをかぶり、その上から四つ折りにしたテヌグイでしっかりとハチマキにして後ろに結び、その上にメガネを付けることになる。海に入るときは顔の両脇に垂れたテヌグイをホオカムリ状にしてあごの下で結ぶが、海に入る前は、そのまま下げておいたり、暑くなれば折りあげてハチマキに挟む（写真6）。髪の毛は昔は長かったので、年寄りにはグルマキ、若い人は八の字などにして後ろで丸めて結んだ。

〔テングサマスク〕 戦後、柏尾ではテングサマスクと言う変わったマスクが工夫してつくりだされ、それ以来ほとんどの海女が顔面につけて顔を覆うようになった（写真5・8）。柏尾の村特有のもので、他地域にはないであろう。

隣村の吉浦にさえない。このマスクの持つ意味等についてはすでに考察したが（日本風俗史学会、第二〇回大会）、その詳細については稿を改めて述べたい。

〔テングサイショウのシャツとコシマキ〕 テングサを採るときは、白地に縞や格子の木綿モンで手づくりしたシャツとオコシのテングサイショウをつけた（写真1・7）。上下お揃いで作ると美しく、下に着る古いシャツやモモヒキのボロかくしにもなった。

シャツは洋風の丸襟、前明きボタン付き、袖はカフス付きシャツ袖である。素材は洋服地でなく、昔ながらの反物であるため、その並幅をいかし、前明きが左側の方によって仕立てられているものもある（写真6）。コシマキは横に二幅はいでその上にサラシ木綿を半幅つけ、紐をつける。

木綿布は葛塚織り（現、豊栄市産）や亀田織り（中蒲原郡亀田町産）の綿織物を使った。もうそれらの機屋はみんなつぶれてしまったが、デタチを作るにも、布団をつくるにも皆その産地からきたものだった。ほとんどが白地で、縞や格子など好みの色柄を用いた。今の布は薄くてつるつるしているが、葛塚木綿などはがりがりしていて厚かった。コワイけれども丈夫だから葛塚モンを買って縫った。

年輩者はわざわざ新しいものをつくらないで、野良でしめた三幅マイカケや野良にはく紺のモモヒキをそのまま、着用した人もあったが、海に着たものはごわごわして肌触りが悪くなり、野良には使いにくい。昔はやはり海のデタチは海専用のものとして特別にテングサイショウをこしらうのが常だった。最近ではコシマキをしめず、古くなったズボンを利用する人も多くなり、七、八年前からウェットスーツも出始めている（写真8）。

〔下着のメリヤスのシャツ〕 格子木綿のシャツの下には、木綿製のメリヤスで裏がネルのようになっていたばあば

あの厚い長袖のシャツを二、三枚くらい着た。打合せのボタンは三つか四つあり、男モンでも女モンでも良かったが、女モンなどはめったになかったから、男シヨのお古を貰って着ることが多かった。下着を三枚も重ねて着てその上にテングサイショウを着て、その上に更にチョッキや綿入れのハンテンを着る人もあった。一枚だけ着て潜る人もあったが、そのシヨは早く海からあがってきてしまう。海の中に半日浸かっているためにはやはりメリヤスを三枚着なければならぬ。海のなかでも厚着した方が暖かで、水当たりもやわらかい。ウエットスーツを着ると同じような効果がある。

〔パンツ〕 下着の下衣にパンツをはくようになった。ここでは昔それをサルマタといていたが、昭和五、六年まではそんなものはなかった。今のように売っているわけでないから、木綿の反物を買って自分で作った。やはり格子木綿が多かった。並幅布を四〇センチ丈位にして四枚折り、一方の上下を上は長く下は短く斜めに欠いて、脇をワに縫い、マチを入れて股下を縫った。海から上がった時は、パンツ一枚にツツレを着てどこにでも行った。

〔モモヒキ〕 パンツをはいた上にメリヤスのモモヒキを一枚はき、その上にコシマキを締める。モモヒキはやはり男物のお古などで、長いものは足首までであった。だらだらして長いと海に潜ったとき浮き上がりにくいので、紐でひざ下や足首で縛った。前側に紐を縫い付けておいて後ろに回してから前で縛る（写真7）。

〔オビ〕 下着の上にテングサイショウのコシマキ、シャツをつけ、その上にオビをしっかりと巻きつける。サイナワをおなかの下に締める時に痛くないように、またテングサイショウの中に空気が入らないように腹に巻く。

オビはサラシを用いた。お産のとき巻く腹帯と同じくらいの長さのサラシを広く三巻きか四巻き巻く（写真1・7）。ぐるぐる巻いて横できちっと結んで、その端をぶかぶかしないようによく隠しておく。前で縛るとテングサ桶を手繰

るときに邪魔になるから横で結ぶ。一反のサラシから二本分を取り、少し余らせてテヌグイのかぶりもの後ろに付ける布に使う。新しいサラシをつかってもすぐしわになるが、洗って干す時は良くしわをのばして乾した。近年は野良で使っていた裂き織りのオビを用いている人も多い(写真8)。

〔ゴムタビ〕 足は昔は素足で海に入ったが、昭和三〇年頃からはゴムタビを履くようになった。海の中で岩を蹴って浮き上がるとき足を切ったり、オコゼ(魚)などに刺されるのを防ぐためである。ゴムタビは本来は田仕事用の足袋であるが、肌と同じ色の、足のつけねのクルブシのところにとびたつくとつく、薄いゴムの足袋であった。最近では靴下なども履かれている。

〔海から上がった時の服装〕 海から上がってテングサを干すときは、濡れたシャツやパンツを脱いで水浴びをして、テヌグイでよく拭いて、乾いた柄木綿のシャツを着た。



写真9

コシマキはテングサイショウのコシマキや田畑の仕事に使う三幅マイカケをした。年輩者の中には、コギンという、漁師のくつろぎ着用のヨリの良く掛かった糸で織った藤布を素材にした、昔ながらの三幅マイカケをしている人もいた(写真9)。三幅マイカケはコシマキ状に縦に三幅半(半幅は紐を取るために欠いてある)にはいであるが、締めると前で重なるため三幅に見える。四枚からなっているので四幅マイカケといっている村もあるようである。裾部分には動きやすいよ

うにスリットが入っている。

海から上がった時、唇が紫になるほど寒いので、田畑仕事用のカスリのツツレ（カスリやシマ木綿を二枚重ねて粗くサシコにしてから仕立てた仕事着）やハンチャを着た。ドモコモもかぶる。

テングサイショウは夏が終われば二日間くらい塩出しして、干して、また翌年に用いるためにきちんとたたんでしまつて置く。それでもテングサイショウとしてまた毎年一枚か二枚作るのが常だった。

四、まとめ

最後に、最も主要な海産物であるテングサが換金されるようになったのはいつごろからか、その衰退はどのような道をたどったのだろうか。

村上市役所農林水産課の資料によれば、明治三十七年には県出荷額の総量ながら四〇〇トン（大正元年一五〇トン）とある。その中に上海府地区のテングサの含まれていたことは話者の聞き取りからも推測できる。上海府漁業協同組合の資料は昭和二九年からであるが、二九、三〇年度は二万貫を越えていたテングサが、三一年度九六〇貫、三二年度の一四〇〇貫と急激に減少したまま低迷し、多少の増減はあるものの、四六年度七九二貫、四七年度二三六〇貫で記録は終わり、五三年からは出荷なしとなっている。

その原因は三面ダムにあるとするのが通説である。市の農林水産課によれば、昭和二四年着工した三面ダム工事の、二八年完成から三年後の三一年からテングサが減少したとされ、先の上海府漁業協同組合のデータと一致する。そし

て村でもテングサ議員と通称される県会議員の活躍で県からテングサの保証金を得ている。

テングサは昭和三一年から少なくなってしまったが、ちょうどそれと代わるように、昭和三六年頃からアワビが採れるようになった。なぜ採れるようになったのかその理由はわからない。昭和四〇年代が最盛期となるが、しかしそれも乱獲によってか減少し、村上市の水産試験場による稚貝の放流もあったがやはり衰退ぎみである。

上海府においてテングサは、明治後期から昭和三〇年頃までの五〇有余年間採り続けられ、一時期は一家を支える程の収穫があった。かつて越後縮の上手下手が嫁入り条件となったのと同様に、テングサ採りの名手ほど望まれて早く嫁した。またよいテングサトリになるための環境は子供の時から準備されていた。

服装については、佐久間氏の聞き書きによれば明治末頃までは、メリヤスのシャツもなく白地の上下衣だったらしいが、いずれにしても袖が長く身体を良く覆うものであった。勿論テングサ採りは、命を賭けた仕事であるため機能性や丈夫さが最優先されたが、素材や形において、また着装の仕方において、より美しく見せるための配慮もなされており、それはテングサトリイショウという命名によっても象徴される。女の得ることのできる収入という経済的裏付けによっても支えられていたものであろう。また柏尾では、覆面頭巾ドモコモをかぶるのとおなじようにテングサマスクを考案して、日焼けするのを防いでいる。しかしそれがすぐ隣村の吉浦には流行しなかったところに上海府の村々の独自性と停滞性が読み取れる。

上海府の海の幸は次第に採れなくなってきた。それはわが国の高度経済成長がこの村に押し寄せてきた時期ともほぼ一致する。若い女たちは海に潜らなくなった。色が黒くなるのが厭だからともいう。今まで海に潜っていた海女たちは五、六〇歳以上になってしまい、海に入る人はますます少なくなった。かつての花形のテングサは皆無である。

それでもアワビやサザエによって、若干の収入を得て、そのほか自家用にカキ、イガイなどを少し採っている。それを見ながら上海府の元テングサトリは、「今、上海府の海は、冬の季節の中にあるのに違いない」とつぶやく。最後に、調査にさいして、当時の上海府地区の婦人会長、平野チエ氏の全面的な御支援と、村上市役所農林水産課、上海府漁業協同組合、並びに県立新潟女子短期大学池紀子・池田典子・長井久美子ら各氏のご協力を得たことを、深く感謝いたします。

注

- (1) 山崎光子「越後の民俗服飾―藤布衣について」『風俗』一四卷三号 昭和五十一年
同「上海府の藤布」『新潟県産業遺産の旅』新潟日報事業社 昭和五十七年
- (2) 小田島允武著 源川公章校訂「越後野志」越後野志刊行会 昭和十一年
- (3) 「海女」、「一六島紀行・海女記断片」、「日間賀島・見島民俗誌」ほか
- (4) 「宮本常一著作集二〇・海の民」ほか
- (5) 長崎県教育委員会 「長崎県の海女（海士）」 昭和五十四年
- (6) 阪野優「海女のいる村」中部日本教育文化会 昭和五十五年ほか
- (7) 渡辺行一「岩船の海府を行く（四）」『高志路』八六号 昭和一十七年
佐久間惇一「海藻採り聞書―越後上海府村―」、瀬川清子「新潟県上海府村の思ひ出」『高志路』一五八号 昭和二十九年
- (8) 伊藤節堂「海女の習俗―村上市上海府地区を中心に」『蒲原』四三三号 昭和五十二年
- (9) 矢部キヨ「生産生業」・赤羽正春「海府―村上、海の民をめぐる」『村上市史編さん資料』一号 昭和六〇年